



俳諧尚書會

乾

中村俊定文庫
文庫 18
615
1



密家り師慈親了ふ僧あり
ししじの年より百餘り二十九
歳の星五相をかき移し鼻柱
小免うこの法なく歯は生つきの
大根以物の数とも廿五の百二
十七年法年ころるね先の杖を
つ死初しともや海小前代未少
の要ふよ人なるりしう然也



○
け玉の暖似ると侍えて尚書云の
句わりしと七十三翁秀玉とまじり
服をいひて八十四翁蓬蓮第三の
句より由志つまでゆひより高年
長壽の輩集つて六これ韻と終
つ三十人の齡二千八百八十餘
年ち祭かく世に稀な教俳諧
我人ぬもむちりうさて「匱中」

うらふみ屋んんちき業あらんを
人々秀國を勧めしまよやくし割
刷氏浩すしを物となしぬとらさて
何やの書ふ三老をことやう
書いぬ更をも何とやう事有て
是も何とやう書ふ尚書のと云ハ
法越の何とやうの御門の母より
誰と三老と云ふたう記し事

あまの母の母の底をいれくわ
賞なりし年一めしけあをも
かく望ふとわ下巻と一と也秀玉
うじの國一竹脚きし時主翁小
さつらりゆらし我も幸便し
編末に附しぬら其のりも秀玉
みつらし本まきん我の形りし
事小あはれ唯此尚齒會れ序

のこ終ふしゆらき書ならぬ

天明五年三月のうゝ免
漆井の山屋小志新書

月村所筆翁

前年春させ玉小尚齒會乃序
染井小海一まはるんおとち起方乃
御筆あまは四季能吟ハ諸君子此玉句
たしひるち起友とち乃句を
とち母子の茶とちいし
詩をいしあき和歌あそいし
春陽の初めより
吉日小糸の故年尚齒會

ちりり

唐香山八老尚齒會之由

胡杲 八十九壽 吉皎 八十七 鄭據 八十五 劉真 八十一

張渾 七十七 白居易 七十四 未及 七十 狄兼謨 盧貞 七十

宋尚齒會之由

張好門 八十五壽 李運 八十 宋珙 七十九 武允成 七十九

僧曇寧 七十八 魏后 七十六 陽徽之 七十五 李昉 七十一

朱昂 七十

古今著聞集 五

兼安二年三月十九日前大宮大進清輔朝臣

六十九 寶莊嚴院のま和哥比尚齒會を

終せり散位敦頼 八十四 神祇伯顯廣主 七十八

日吉祢宣成仲富祢 七十四 式部大輔永範 七十一

右京權大夫頼政朝臣 六十九 前式部大輔維光

朝臣 六十三 清輔朝臣假名序かきりりりり

敦頼衣冠の様れあけきぬ三をいりり

趨乃杖をつきて久利皮の齋を乞ふ
正徳四年生嶋幽軒 八十一 壽 尚齒會を乞ふ
志賀隨翁 百六十七 小森閑齋 百三十六 岡野道清
百一 左沼宗元 百七 加藤傳左衛門母 百七 石守
權左衛門 九十七 水野備中守 九十三 芝山七郎
左衛門 九十三 下条長兵衛 九十三 岡本半之丞
九十二 谷口一平 九十一

享保十一年二月福岡の臣大道寺友仙 八十八

尚齒會を乞ふ客志賀順翁 百七 其外五老
取持寶生將監 七十三 小一とあところ所々
國々も七詩哥も乞ふところ 百三十六 老
一句言此哥仙を乞ふ 百三十六 俳諧尚齒會と
題し侍りぬ

石壽秀國

乙巳春三月



歌仙

暖うき大詠待るもや尚齒會

七十三才

よめ若本土草のやりくわき味

秀國

舊れ棠よ冠者ハ小弓を携へく

八十四才

塵匣

野末きれいそ草綴りきり

八十五才

白抄

脚を平に流し風う身れう

七十五才

餅字

本槿れをくも星のゆかり

七十八才

素兄



百十九才

沙門

慈觀

是も又何處乃薄意とひきりし 七十六 莞尔

春も小春も多りし 七十六 了因

殿深く玄措の餅此音を 七十六 木白

門掃く形家尉 九十五 清好

万年紙大和巡り 七十 夜白

豊等飛多八景物 八十二 永閑

澄舟子証被の音 七十 保牛

秋を覚ゆ秋夜 七十四 滄浪

下戸あり 八十五 嵐々

手も 七十三 花礫

蓬萊此形 七十三 青英

至極乃日和 七十七 十一

何意 百五 徳翁

曾孫 百十一 玉右

春述懷

之 孩子のこね八十八おう那 米翁

雨中即興

雨啼て郭公好る山居かき

暮秋

物志るぬ腸乞一秋乃ソ美

明日香山に赴いて

いさ焼火下戸を叩る此漆子と

山家詠

陽炎や山屋竈火の消えより 鳳好 文成菴

曉

通舟を〜とゆき舟きり郭云

市中近閑居

淋さ成折崩し多る踊うを

冬至まのしあや

聖之冬至まのしあや 咲ぬ室う梅

題桃

桃咲や三千丈の日れあふ芙蓉峰 冬央

題郭公

何れも奴妻の何れも子規

題めら

迷りし科にあふもくめら

老るあそび

あふれんあそび言の紙に

正座の八何所を定めん花の幕 香國

森陰乃社燈をちりり納涼の

花をまき足跡を山より紅糸に

文るあは培家の朝よ千をの

清江亭

うとらきまうら小燈を枯る菊 甲長

相ひまき地う隠る牡丹如を

草の家よあそび燈りや秋の雪

焚火をるあそび花よーとれに

櫻仙

若菜はうつや青き空より
春とやうそ人を結ぶ中
春はわづれ昔もあはれ
風小日のまねて深山うね

古友

近よれん梅やうきり
五月雨や梅をばあはれ
名も自や豆まゝよのハ
皆人より唇をくちくち

春抄

楓窓
杜綾

枯枝は梅と見へきり
卯月初のころ深川

卯月初のころ深川
尾花菴平まうりて

麦秋の昔を憶れり
秋雨

秋雨

人よりあぬけりも
墨少

墨少

牛嶋の角と見へきり
冬木立

摘州や家家ハ臨年八重葎 沂流
御後川灯の燃しきれされぬ
名目や世を忘るる 岩の松
をいつめて年古の池に氷うた

中よりて空の目の舞ふ雲存也 沾兆

陽亭

物の香小燭るるさねあさる
落葉此も春淋し 落しと丸
客棹くあさきし松林のうね

杉林く杖ひく梅り山路うた 子孝
葉を出る草小庭のやぶの螢
鴨川や町古れ鐘の音 詠古寺
迹も此果も及ぬきり 枯野系
久望りゆくささや雷の音 瓢牛
薄く濃伽藍彩を著る也
籠さめえ善川 秋や 瓜畠
入句を松よ譲りて 落葉外

花を踏く雪新乾巾東山
百千多云此意も切一部云
喉の中種のを末を菊う茶
由幸之少う金丸の味う可る也

幽叟

了因

卯一と墨張子に相も故螺地
笑満く由起もやうぬ牡丹を
名目や峯のちも笑ひあ
濡ちくく水き顔巾初可る

亀常

花をふくちまうせし
氷うおとの黒き云地う扇可南
此ひと和空やまじしと北川
炭賣よ和くもせり電う門

東籬

一入や青葉交りうの雪
度りま八扇忘れ涼可那
新ま夕暮列と淋一鹿う
山里ハ古くん院しき可雨如也

倚松

煙り紅と見れぬ船場此柳う那 春風樓 和水

郭公堂へ面くぬ手留可し那

新燈子雲乃無形やう如月

山部川丸ま濡ぬ時るゝれ

言上まゝ眼をさるる柳名 祇國

昔昔や引えさるる川池志ま

隠持く眠れさうとく時子此

片足を休めて路々の可るま

腕こぢ不負くと老る網引や 亀岱

供給乃喜信中口く系 陰

形考乃干梅干時了人を及よ

あ仙や短くまより此上川さ

山寺如海茂る枕カと 古用

手を突く見あらし群の牡丹此

茸持る音く飽けや鹿の声

鼓足や中とれも機変は知れぬ

花と葉のくろ路合る橋う那 風馬

田も畑とてあま草中己目雨

鹿もあま遠きハ山此安可南

空空小わききま堂中大根川

るり歯小や〜〜布く蘇北 徳蓮舎

わ〜〜〜お宅棧おの金屋風

白菊此千代を八重咲御園う

連片忌や吹りてこ〜〜高軒

荒り〜何おやり〜ん山さ九段 秀魚

麦搗のおち〜は舞よ〜涼う

月と出〜お山も鹿のかけあし

傘此亭小休〜〜〜此

雲と見〜花を踏新少路うな 冬壽

突袖を〜〜あろ尼〜裕う那

入おを志^{は島寺}〜庭うおよあ

されりや〜〜きハ裏の人

船出せし岸へ志しし柳の枝 五溪

漸くと暮るる雨 己白雨

秋草中 毒も葉も色さかくと

牛窓をく 掃りてをり 町を引

見之れを 沖に家あり 沙干かき 松壽観 其國

堀堀と 建着板もよめぬ 以

吟しし 掃りて 男世帯や星をく書

晚鐘ハ花よかきく 一 散 紅糸

世に事を 空よ 悔なり いうのあり 梅窓 北峩

雨雲の 空を ぬれぬ ぬれ 堂より 火

散 紅糸 花より 淋し くの 鐘

居ちを ぬれ 暮つ たり 一 ぬれ 鐘

くまき ぬれ 思ひ ぬ 描の 掃り 計 歡窓 鶯前

角出 して 誰を 恨と かく 川より

去りし 如き 嘆く 淋し きの 花 砂より

節 出さ ず ちを せり きの 舟 此 言

水も足れと流るひ川を流るる那 甲二
木曾川やまゝ流るる下の水は吉
海心乃書毎遠くや一の都
濡る小舟れ光るや夕可雨

望岡亭

桃牛

櫻く此羽を休めきし椽の先
拙あ帯てある路く田面うま
入お中秋の路くぬ鏡をく
香もや掃除くも待起る内

春雨のまゝ障りぬ空さの那 秀虎
ひと口小豆くぬを花の若子おま
人数小履とれくくく着る庭
夕沙や友まちうわら碓千鳥

山崎中杖う笛き一海北川 微笑
火は清く淋くき朝乃堂く那
名身やよあれをれ知くた
口切や詠次く長きあの二三枚

猶遊ハハク心と走一小遊於 赤白
有波平折川小月影影如月
目佛と咽の仙毛月是之
葩うまゝあまう一降と云

梅々まき也描北破り 陪子より 泰郷

之中あまもさるつみく増る中
お止く家も中なる 幸也 姑
廻板如生海流小雲也 落 氷

春の部

垣の梅 爰てたゞこけ火をかりん 菊芳
 出さもく 垣うわたり 落の草堂 桂阿
 日をさしち 重みても 見ん山 祇風
 江をさそ 阿うさ 留まり 涅槃像 洪光
 陽炎や まいこと えたう ぬき 魚光
 及み 靱うさや 芳野 如梅 奇峯
 南わく 神を 摘魚う 以 未曉

一桑東

水澤樓

雲耕舎

登るとも 思ひく 花の 峠う那 苔雨
 枝折して 舟よ 疾るや さくく 舟 志連
 入おハ 撞とも しく ぬ梅う那 水府 祇霍
 白雲此 果ハ ありうり 山さくく 梅宇
 志系の 何取ま せりとも 佐ら良 百磨
 板石を 魁し ども さくく 舟 拙哉
 梅ひさく 何道の 御所乃 茶見也 文魚
 人よ 醉深窓 稀ふ 花見う那 曾嵐

三

梅乃せく床中と梅北田舎を
 為水
 和らき一人の出入中むめり花
 万国
 香れ品乃存白ひたり畔の梅
 五岸
 梅の香や花を忍ぶ人あゝぬ人
 芦水
 本隠小海苔と鮎次子や海静
 三湘
 古恙北味啼よ組ません路の臺
 木白
 散るとも姿崩さぬ梅う那
 花徑
 雪解して有あゝゝ起越路外
 秀雅

常此まよゝそ新や牛つゝい
 濱夕
 うくひきの啼乾くと去をり
 暮潮
 一日小百首詠く喜氣蛙う那
 花徑
 それうと起意うもつぬ蛙う那
 盛巴
 後吟中隣ハ茶屋と垣續き
 蛙井
 為友とこくり眠中磯う春
 桃子
 花乃空うを命北洗濯日
 何佛
 連翹中結あゝ水垣根より
 静好

夏代哥仙

雞口

新あや免法とよ尺の京う那

きハ清き安起帷子乃いろ

昏影日せ不露の鞠子をまれそ

遠起林虫月哉 拈也

本免此又念時を誘ふらん

破一廁をぬり承秋夕也

秀國

祇丞

温克

小知

執筆

三子子成初るまを我もきんて
子と白骨乃おわし讀なり
物くの越路ハ何れ死に留る
朽小日和志怖——き雲
魚躍るあせ身以の剛れを
夕部静年神いのる聲
側ちくか乳も乳人も待侘く
炊けぬ魚く風毒戸より

國 口 知 巫 克 國 口 知 巫 克

文るとも音もつらみ静静乃時
花の芳野へあし路せう静く
踏濁を澁澁よしく哀む月
儘く死奇居虫れ命 這出
風情をく干着の美北門くよ
腹乃辱く福を苦よちく如旅
憂時の心美ひお死をを——
震りし止年 静水子と路く

國 口 知 巫 克 國 口 知 巫 克

雪くもり七庚申の^{（？）}縁^{（？）}味^{（？）}とく
乙五寺迄橋も三川越を
猫乃目を足そ夕飯をいそぐ家
襖をも張り画をも去人
よい風をたもそこゝろ今年竹
水も隠れく草乃花
月影千虫のきゆくあつる
来ると思ころふ原中如茶屋

口 知 函 克 國 口 知 函 一

ウ
わく紙布楊の先ふり下す
さつと空は晴も暮お
八寺乃るそ路痛哉忘れり
舟一舟りけり安が深との
小藪もをいふのちと花は咲き
きけりやうと暗れ

口 知 函 克 國 全

夏より部

日輪ふむくい合ふる牡丹北 洪光

掃出て牡丹あふん 更衣 楓舎

乾く魚き日ぬく新若き北 万川

白雪れちきれて飛や降る系 馬十

表り雲月の表や花きき安 菜名 花徑

山賤ハし川きくき部云 白羽

紫陽花や花を集めてふし川 自樂

御佛ふまひもあひ百合の花 馬十

石舟や雛の宮よ合ふ花ちよえ 嵐々

物の潜るみ際思ふ夕日北 武陵

涼さ中岩よせうみ北吉 秀尾

蒼君海北熱あつるや重り岸 蛙井

おハ持りく起めをえり水原刈船 鳳羽

葩より福くくも牡丹可南 其道

蝉の声三千坊表り宮あう那 米夕

秋の歌仙

有き道一谷岡の菊此ちあはれ咲

赤白

空は此海をへかろまを夜骨柳

万国

跡月乃わくくをを師はくは道と

秀國

羊此あまふ庭雨うせり

芳國

くくくとを紫吹の極のくへ

秀虎

くくへへ帆のまは子隠る

微笑

その初めの鳥よと新文の鳥
 俄に和らぎるるるるるる
 蚤るるるるるるるるるる
 小嵐二足ちの路くと歩は
 休むあてなくも一古社
 一里う原を越へて通山路
 棧臺は陰の足まうの姉妹
 師走のあしきりおちしる
 亀 虎 笑 國 万 白 芳 白

往還を度り車はくらくくと
 伽藍の修葺花不障の路
 隙をよれ此永乃日お母待て
 爺々亭々るるるるるる
 日乃園へ投はくくく心裏と
 いとの路りと掬乃面
 兵糧乃半ハ路々以砂俵
 重き枕を帯く帯談白

弦いさる路のいまさう
及古まを
万
ぢいぬ沙踏毛つゝ
起日移り
國
あふれちりり
雨に都云
芳
まいさあ起り
風苔の釜れ湯
虎
疎碛の河をおせは
休よ
白
病りハ
心歩ひ
路の
若殿
岱
紅葉
ま日
れ
秋
あ
る
る
言
れ
月
鹿の
あ
し
と
ま
り
り
岩
志
家
芳

秋風小例の脚氣れ痛むやら
虎
いれをハ
夢ま
や
れ
河
の人
れ
張
筈
万
交
類
と
も
あ
く
庚
申
れ
お
も
す
り
國
止
り
も
あ
く
を
小
雨
志
流
帝
起
笑
近
き
ら
ち
花
ハ
ひ
く
と
忍
ぶ
ま
り
岱
代
跨
げ
お
書
り
川
筋
其
國

秋乃部

草指中 諷くく先も多し 菊芳
 立よりて 尾花を月の如き 祇風
 ましき 紅葉柑の白小 紀の詠 桂阿
 世をよき 換へて 庵の桐ひと葉 奇峯
 白菊や 赤かゝり 知るハ 木白
 露とよく 至念せきり 花中系 志連
 曳形よ 今朝ハ 塔乃 露空 秀雅

朝露不 葉れくく 朝中 法山く山やま 濱久
 以 風のをき 吐くく 露乃玉 松女
 秋風よ 嘆中 波乃 乃ま 貝 梅宇
 秋乃 風を ちむ 枕 阿ハ 三湘
 風斗り 秋のを 富士 峯 拙哉
 呼客の 云ち けち 暮 麦乃 花 理同
 名月や 打 浅く 故の 新 湯 苔雨
 富士 詠 波 尾 秀尾

名月や指折る秋松の上 花徑
 穂の虫のや月も秋夜はさうつゝ 芦水
 起る見月指る見月指る鹿の声 盛巴
 さく月小拍子のわらう枯う那 武陵
 海も見月又山も見月旅る月 百塵
 重く重く碇千樞の折ゆう那 五岸
 見ほ水くひくく不菊此想ひれ 為水
 ふきち起る隠居此曠と菊花檀 桃子

夫と大門たうせうきあふは未曉
 樽稲を丁の弛走や後る月 曾嵐
 我おる極小体むや菊能り 暮潮
 いさよおや月も秋夜のふさぎ 何佛
 唐の糟ハ移りし 十三夜 静好

揚子 矢員能譜二万句 満尾らおる

月村米翁君より 従宿老と 別号をとり 終る

宿老と菓守り柿小御意おと 八十三卷 水雞

老の初さきり

九ののやのの字のちりのちの月 大赫

於れれはれ摺れちりもやれれり地

老乃乃ち乃秋乃おら乃乃乃字乃

猪乃乃や系ノ実ノ入ノ糸ノ表

神神花神神ち神神もせ神神ふり神

五句れのうらうら

無あこころれま

八月十七日尚坐

題 鳴子 杵を袖と 秋の音 鹿

落る日や鳴子の隠れ引かさめ 鶏口

善人乃碎碎きハれ杵をうち 祇丞

山里れ客も智よと袖味鳴う那 温克

隣へハ来り人毛りり秋乃れ 小知

笛をうく人小多りり男鹿也 秀國

右

冬の寄仙

一里と八守居よきや傘此空

祇丞

野路もいとけを庵お乃口切

保牛

臺部耳よ記深々の袖差せて

温克

小舟のちうと新艘を栄

秀國

三日舟の形より和を保始めり

寛美

実此八風舟障子張なり

丞

五種まふひと百八煙子斗之
さり川流より續く書あけ
川苗水清府あつてもそら
をのう心より慈年知れ
釣簾より命婦れ歌のあひき
角力節會の詠り 謔り
照月う洗ひ上るるされ石
さしてハ能の水お押れ
美 牛 丞 國 克 丞 牛 美

軍兵をちるる事れわこさハ
不以此流をなくあまの敷く
新れ極るる中ある雨の音
砂雪臨のしりもあらし
お忍ひれ茶乃茶内お祿宜連く
お火りたるこそ書新書決り
松 女 國 丞 美 牛 克

冬北部

渡一場をひらき漕ぎきき魚光

湖や葦夜香して雪乃原楓舎

大雪や詠ゆ多えせぬ詠世界 其道

雪北上よしん子安し冬北梅 祇雀

落る葉北中よ笑少中瑞と糸 白羽

空菊や葉おとハおよさしあう 鳳羽

あき北也しをまふ氷う那 理同

時雨降中北往事や舟子とと 米夕

口切の釜乃あきりや初しとと 了亭 八十一翁

顔乃世や棧敷こころとせまくとと 白抄

ひとせ乃反古ふりりる古こよみ 松女

初雪やあき年ぬる床乃山 何佛

尺を接し月ハ夢や小杖吠る 万国

あき松ハおん魚乃しとと 連郷

山茶花や子も町を空乃色 芳國

四季混雜

千軒乃漆耳白小新酒うま 李冠

物ありと足進んおと阿達まは露

徑う〜ハ足えぬ葉堂や山梅 亀宗

水〜多や錦離れ〜多乃上

やよ梅大友人志花のりや 葛道

聞けや〜阿多交りの摺曰唄

意志り〜月足弱も軽〜 連郷

片寄〜ぬ人ハ柳の海う那 幾十

日子育月よか進新絲瓜かち

二三尺猫釣りあける故蟻也 其冠

嘗や梅子唾を引〜露の内 露翰

月々音いハ丸足下〜たぬ石

扱去起菊登人乃命かち 八川

菘海結浪を蹴りつ〜めうか 素兄

畑志り〜瓜蒔せ〜夕う那 秀國

行年其何をきこえんおろ重 翠如
 よち登る力なりけり 飯の花 雄跡
 言高し不破の關家此推し雨
 荳陽草や濡えかへぬ花の色 李十
 稲妻や二度も見せしる 冷たぬ石
 物いぬ桃を志る 魚や田舎道 素梅
 降雪や夕靄柳の片さうり 秀國

四季

都々々々々々々々々々々々々々々々 鶏口
 あそ沼の夏を元とやわきめし
 約ひきれ甲斐や都の富士と見ん
 ひと町向やとてさうさう涙一弘
 連乃りて平沈む布苗代田 祇丞
 端午のや兜小むさ小九十九髪
 葺舞や借れぬぬるとり子等
 落葉おや年此閑路の棒きひ

炭多し一絶あり山は高き那
たぐ戸は一年あり乃多難也
つゝつ北ぬ詠語の遊やふれ月
鞠子にまきこれや中納豆汁

温克

初梅望ま誰う事そ初さつ
人中へかくおとあつ絶あつ扇子
腹あやせ鶴山こえそ小田北雁
道法のあき世おとやうる雪

在轉

松南ふくつとを嘆り梅北月
橋よりハあ北月とすみ船
七種中よの阿つ多あつ花の秋
定家郷寂蓮西行とこれ善

小知

白雲を蹴めけ乃塔中 山梅
古酒よる月の舟や蓮乃花
誇りあふ枝ささまりぬ秋れ美
ひと終ハ美濃も近江も納豆や

常仙

法螺貝吹かちしと山さくら
雪堂

ほろきり啼つるねや雪山寺

誰待や立待くしあをみちし

い川の宵も柱層乃空穂ち乾

春さし学阿さね土乃上
菊堂

足と列ぬ草れ小葦也皐月雨

草指や三川四川や川一里鐘

敵否を犬小智しやお舞引

薬とそ子を這まらや花う山
白頭

開山の硯うあやおきりをも

名月如田舎新徳の花ひきき

きぬく小又まきとる路中うな

晴天代塵と足えきり蝶ひし
保牛

子乙女の唄は棚田代以ねろし

漆屋しと中鬼灯り夜あろも

泣もるおとせよまきをちかく拵擗

うるーかく門も羽をぬき里燕 吉原

山寺や夏ふくげく佛生會

いっ計峰の嵐や 赤塔地

炭かまや摺原遠るうーろ山

此書も花ふくけーき命う形 連馬

草乃戸や柱をぬく乾蟬の声

角立くくしり向鹿や峯れ月

鐘はるしや 窓ち地耳の底

海棠や折くけてもまゝい免ぬ爰 野水

戸越明て足孔ハみ鶴れ外飛け

てんく此方ふまふく乾枯う那

鶉の障子戸かけや冬本立

落ちては書れ拵ふ拵う那 寛義

笑ひ顔く夏さりりやほくきん

そ川草や本の名も糸城名かりん

芭蕉忌やせめえ飯六英徳近江

法衣のしや終る所の庭すゑに

易難

人界去来

幡鉤く遠入ハ蚤り奏るちる

逢之その後り耳や虫此聲

枯くく聖ハ松のこ花在竹道

笈とせ此極も朽を花り山

萬亀

漸くと乳房を奏せし各節は

涼しされ方やむ躬と生おる

町白るや思ハるるさるる

あいらるる此種よそ海へは梅も

蓬雨

堀うの井此底見せんも則ち

量あるも中宵の影や海り月

蕙此毛のたおよさるる空さ此

聖ハ又あまをり風ゆく柳う那

秀國

今に於て凡ハ詠ま古規振形う

名月や春はき唄を多し観ふ

振立る小僧侍のや冬こそ

天明五乙巳年

秋九月

江戸下谷金杉村

彫工

江川八左衛門

